



ねこ開業する。社会的企業というものについて

私ごとですが、「猫専門のお手伝い屋さん」を開業しました（してました）。

① ねこから目線。 猫専門のお手伝い屋さん

2018年の3月で立命館を退職し、失業保険をもらってぬくぬくしながら、毎日保護猫活動をしたり、自分の興味関心があるところに出向いたりする充実した生活をしばらく送っていました。定職につかず猫のを中心に動いている生活を「ノラ猫生活」と呼んだりしていました。ただ、失業保険は7月であつという間に終わり、生活費をなんとかしなければいけなくなりました。でも、常勤になると週に2日くらいしか猫の活動ができないんです（当たり前ですが）。2日しか自由時間が無いと、10件相談がきても2件くらいしか受けられません。猫がいて、手伝ってほしい人がいて、手伝いたい自分があるのに、手伝う時間が無いというのは本当にもどかしいものでした。

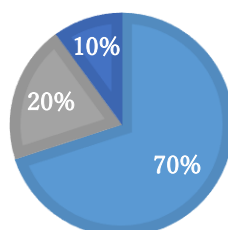
そこで、はじめはノラ猫生活中に、ある動物病院に寄せられる相談で、これまで動物病院としては断ってきた相談を「時給100円から好きに設定してください」という形で私が個人的に引き受けるということをやってみました。

依頼の内容は、「庭で餌付けしているノラ猫に不妊手術をしたいから捕獲して不妊手術を受けさせてから連れて帰ってきてほしい」とか「家から脱走してしまった猫を捕まえてほしい」とか「母親が亡くなり、飼っていた猫2匹を自分の家に連れて帰ろうと思ったが、母にしかなくついていないため捕まらない」など、様々でした。そうやって色んな相談に対応していく中で、見えてきたのが、動物病院に相談してくる方の7割ぐらいは、一度きり、自分がたまたま関わった猫（例えば自分のお庭に住み着いた猫、たまたま拾った子

猫、身内が残したペット)だけを、有料でいいから、今すぐちゃんとなんとかしてあげたいと思っている方だとわかりました。残りの2割はボランティアさん、残りの1割は生活保護と多頭飼育などの貧困ケースでした。

相談の割合

■一般の人 ■ボランティア ■要福祉支援ケース



※あくまで小池調べの感覚統計です

ということは、今まで1から10までボランティアさん頼みだった猫の相談のうち、サービスさえあれば、回る部分が7割もあるということなんだと理解しました。なので、1割の貧困ケースは従来通り人もねこも一緒に支援プロジェクトのNPOで完全無料で関わることにして、2割のボランティアさんとは助け合い(あるいはお互い頑張りましょうのスタンスで)、7割の層に対して有料のお手伝いサービスを作ることになりました。

そこで、できたのが、「猫専門のお手伝い屋さん」屋号は「猫から目線。」

料金形態は、大手便利屋さんをまるパクリしつつ、お仕事を受ける条件は「間接的にでも猫にメリットがあると考えられること」としました。2018年8月下旬に開業いたしました。当初は子どもの一時保護シェルターのバイトなどと平行してやっていたのですが、少しずつ軌道に乗って、現在はお手伝い屋さん一本で生きています。

人もねこも一緒に支援プロジェクトが所属するNPOの理事長でもあり、私の大学院生時代のクラスターの先生でもある村本先生に報告したところ、「それって社会的企業だね！いいね！」と言っただき、そんな言葉は初めて聞きましたが、ちょっと嬉しかったです。

※調べてみました。

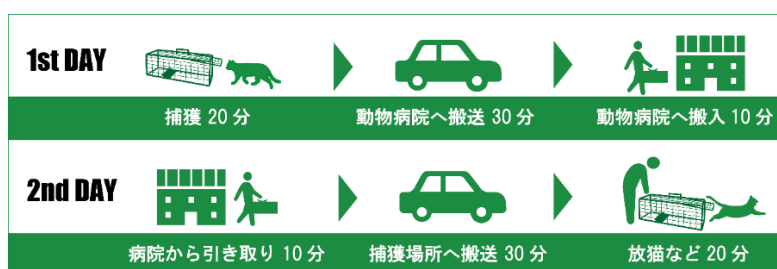
社会的企業(しゃかいてきぎょう、Social Enterprise, Social Entrepreneurship)とは、社会問題の解決を目的として収益事業に取り組む事業体の事である。ソーシャル・ビジネスも含まれる。(ウィキペディアより)

なるほど、この場合の社会問題は「猫の殺処分」。その原因としての「ノラ猫のご近所トラブル」です。普通の飼い主が依頼するようなペットシッター業務や、ペットホテル業務は、すでに既存のサービスが沢山あるので、受けていません。基本的に対象は可愛がられている飼い猫ではなく、ノラ猫や保護猫がメインです。

具体的な仕事内容

依頼で一番多いのは、ノラ猫への TNR（ノラ猫を捕まえて、不妊手術をし、元も場所に戻すこと）のお手伝い依頼です。「ノラ猫が不憫でご飯をあげているが、これ以上繁殖して鳴き声や糞尿で近隣住民に迷惑をかけて猫が嫌われ者にならないように、不妊手術をしたい。でもノラ猫なので捕まえることができない、ノラ猫の不妊手術を受け入れてくれる動物病院を知らない。」といったケースです。そういう場合は、TNR の不妊手術をしてくれる動物病院の予約から、猫の捕獲、病院への送迎を実施します。不妊手術はどこの病院でもいいと言うわけではありません。飼い猫と違い、手術後に数日間お薬を飲ませるとか、2週間後に抜糸をするということはノラ猫にはできません。そこで、抜糸のいらぬ術式で手術をしてくれて、お薬も持続性の長い注射をしてくれるような病院である必要があります。

2018 年 8 月下旬の開業から 3 月 2 日現在で、猫の捕獲依頼は 65 件、166 頭の捕獲のお手伝いしました。うち、14 頭は保護のための捕獲でしたが、152 頭は TNR でした。



TNR を実施することによって、繁殖を防げるだけでなく苦情になりやすい鳴き声やマーキングの強いホルモン臭を抑えるだけでなく、猫の殺処分の 73%をしめる離乳前の子猫の殺処分を防ぐことができます。

次に多い依頼は、保護した猫に里親さんを探したい。という依頼です。開業から 18 匹の猫にお家を見つけることができました。その他にも、病院の駐車場で誤って飼い主さんが逃がしてしまった飼い猫さんの捜索と捕獲のお手伝いの依頼や、家の仏壇と壁の間に挟まって 3 日間も出てこれなくなった猫のレスキューなどなど…。

相談経路の違いから見えるボランティアさんの苦悩

私のところにかかってくる電話の経路は大きく分けて 2 つあります。1 つ目は動物病院からの紹介、2 つ目はボランティア団体からの紹介です。面白いくらいに違いがあることが分かりました。動物病院からの紹介で電話をかけてこられる方は、8 割 9 割そのまま仕事に依頼

になります。一方で、ボランティア団体からの紹介の場合は仕事の依頼に至るのは今の所50%以下です。乱暴に分けるなら、動物病院には具体的な手助けを求めてくる人が多く、動物愛護団体には“情報提供”のような人が多い印象です。「うちの庭でノラ猫が子どもを産んだ。うちの庭の子猫保護していいよ。」「〇〇公園にノラ猫が沢山いますよ。怪我している子もいるみたい。」保護も不妊手術をもお金と労力がかかります。でも、猫が好きならボランティアでやってくれるでしょ？という具合です。「うちの庭でノラ猫1匹にご飯あげてるんだけど、不妊手術してくれない？」という相談では、ボランティアさんがせめて不妊手術費用だけでも実費負担してもらえますか？と聞いても難色を示す方も多いようです。保護できないと言うとそれでもボランティアなのかと逆切れする人も。こんな相談ばかり受けていたらボランティアさんはすぐに金銭的にも精神的にもつぶれてしまいます。実際に猫を保護しすぎてボランティアが多頭飼育崩壊寸前になってしまうケースもあります。私としては、ボランティアさんからの紹介は依頼につながる可能性が低いから紹介しないでくださいというのではなく、困った人ほど一回降振ってください、とお伝えしています。そういう方が私の所に電話をしてきて、手術代の実費はもちろん、それ以外に捕獲から病院の送迎にかかる費用としてこれくらいかかりますよ、という見積もりをお伝えすると、手術費の実費だけで手伝うと言ってくれているボランティアさんのありがたみがやっと理解できるようで、「もう一度ボランティアさんに相談してみます。」と切られるかたも多いです。それで丸投げの相談者が手術代だけでも負担する相談者になったなら少しでもボランティアさんの役に立てたかな？と思います。

猫から目線。という社会的企業がこの社会の中でどのような役割を担っていけるのかはまだまだ分かりません。ひとまず、ボランティアさんたちがどれだけの労働力を提供してくださっているのか具体的に理解するための装置としての役割りや、自分が一度きり関わった猫にたいして、何かしてあげたいと思う人が気軽に利用できるサービスとして広い意味での保護猫活動の普及に役立っているような気がしています。

私の活動の根幹になっているのは、「猫が殺されなくていい社会をつくりたい」と中学生の頃強く思ったあの心臓がぎゅっとするような気持ちのまま。でも、この活動を通して、色々な人と、色々な猫と関わって楽しいと思える瞬間が多いです。だからこそ継続できている気がします。試行錯誤しながら、これからも頑張っていきたいと思います。

筆者



小池英梨子

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

仕事：ねこから目線。～猫専門のお手伝い屋さん～